

平成28年度自己評価シート(中間評価)

校番	68	学校名	広島県立祇園北高等学校	校長氏名	柘磨 昭孝	◎・定・通	◎・分
----	----	-----	-------------	------	-------	-------	-----

学校経営目標					
	達成目標	本年度行動計画	評価	理由	担当部等
1 生徒の主体的な学びを促す授業づくりの推進と業務改善の推進 ①⑥					
<p>生徒が主体的に授業に参加するとともに、深い学びを実現している。</p> <p>指標: 生徒の自己評価4段階(3,2), ICEモデルを軸とする授業構成実施率(80%), 定期試験におけるEレベルの出題率(10%)</p>	<p>各教科で、ICEモデルを軸とした授業を行い、ICEルーブリックに基づく評価を導入する。</p> <p>また、活用コアスクール推進会議を定期的に行い、学びの変革の実現に向けて、理論的かつ組織的に教科指導力の向上を図る。</p>	B	<ul style="list-style-type: none"> ・第1回授業満足度における生徒の肯定的指数は目標の3.2を達成し、3.44であった。 ・ICEモデルを軸とした授業構築の実施率は、目標の80%を達成し、84%であった。 ・定期試験におけるEレベルの出題率は、目標の10%を下回り、8.5%であった。 	教務部	
<p>教職員が業務を組織的に遂行し、創意工夫を生かし、業務の改善に取り組み、業務の質的な向上を図っている。</p> <p>指標: エビデンスに基づいた改善方針の策定と実施率</p>	<p>ダブルループレARNINGを導入し、業務を再定義するとともに、創意工夫を生かして実施方法を具現化し、業務遂行をより効果的に効果的なものにする。</p>	B	<ul style="list-style-type: none"> ・「生徒と向き合う時間の確保」及び「教職員のモチベーション向上」に向けて取組計画を策定した。 	校務運営会議	

【評価結果の分析】

- ・第1回授業評価アンケートの結果から、授業に関する肯定的指標は、3.44と目標値の3.2を超えた。生徒の授業満足度は、概ね良いものと考えられる。ICEモデルを軸とした授業づくりの実施率は84%と目標を達成したが、その中でICEモデルを軸とする授業構築をしたと考えているが実際は難しいと思っている教職員が42%という数値を示している。全教職員が意識はしているが、実際の授業構築が難しく、その到達領域が不明瞭であることが分析できる。また、定期考査におけるEレベルの出題率は、目標の10%を下回り、8.5%であった。これは、授業構築と同様、到達領域の不明瞭さ、活用問題の作成の難しさを物語っている。(教務部)
- ・5月に実施した第1回業務改善モデル校アンケート集計では、「生徒と向き合う時間」が確保できている割合が54.5%と全日制全体の平均値よりも5.6%低い。時間を確保するため、会議等の間接的業務の時間を効率化する必要がある。また、学校経営目標の達成に向けた取組の立案に全ての教職員が参画している割合が、昨年度よりも7.9%下がり、全日制全体の平均値よりも8.6%低い。教職員が自校の目標・課題を共有できるようにする取組が必要である。

【今後の改善方策】

- ・今年度活用コアスクール指定校2年目となり、昨年度と比較し、より組織的な授業づくりの取組を推進することができている。特にICEモデルを軸とした授業づくりや活用問題の定期考査への出題においては、全教職員が特定の単元についてそのデザインを考案し、各教科会で分析・検討を行った。ただ、Eレベルの授業展開や活用問題が、生徒の主体的な学習活動を促進するものになっているか、思考力・判断力・表現力を伸ばす方向に向かっているかという視点に立ったときに、その精度をさらに深化・分析・検討する必要がある。10月の公開研究授業では、ICEモデルを軸とした授業をテーマとして実施する。そこで、全教職員がお互いに研鑽し合う場を設け、生徒の視点に立った分析をし、より組織的に教科指導力の向上を図る。(教務部)
- ・業務改善に向けて会議の改善や起案プロセスの効率・簡素化、校務分掌の再編、部活動の休養日設定により、生徒と向き合う時間の確保を図るとともに、分掌・学年会での業務分担を明確にし、マネジメントサイクルに則って業務を遂行することにより教職員の校務への参画意識を高める。

2 高い志を持った生徒の進路実現と理数コースの充実 ③⑤					
<p>自己の生き方、在り方を考え、進路目標を設定し、その第一希望の進路実現に向け努力する生徒を育成する指導がなされている。(3年)</p> <p>指標: 国公立大学現役合格者数(100名)、大学入試センター試験結果(900点換算)が全国平均点以上の人数(50名)</p>	<p>各学年の進路検討会議等を計画的に(3学年4回以上)開催し、担任や教科担任による生徒への指導を充実させるとともに、受験に向けた意識を高めるための組織的・計画的な指導を展開する。また、各学年の進路だよりをタイムリーに各学年8回以上発行し、生徒の進路意識を高める。</p>	B	<ul style="list-style-type: none"> ・3年は5月・7月に模試結果を基に進路検討会議を実施し、三者懇談を行った。 ・学年集会や進路LHRを、進路指導部で企画し、各学年会で生徒の実態に応じて実施している。 ・進路だよりは1学年4回、2学年8回、3学年は3回発行した。 	進路指導部	
	<p>生徒の学力分析を進め、各教科等における適切な目標設定や、指導の充実を図る。また、模試返却後、課題のある生徒に対して教科担当者面談を充実させる。</p>	B	<ul style="list-style-type: none"> ・活用コア推進会議を核とし、教科会や学年会で分析し、目標達成に向けて具体策を検討している。 ・進路検討会議後、担任や教科担当が生徒に対して学習上の適切な助言を行っている。また、長期補習や放課後補習を実施している。 	進路指導部	

<p>家庭学習の習慣を定着させ、第一希望の進路が実現できる学力を身に付けた生徒を育成する指導がなされている。</p> <p>指標：1年1月模試、2年1月模試における国数英総合偏差値54以上の人数(80名、80名)</p>	<p>進路検討会議を各学期1回以上計画的に開催し、学級担任や教科担当者による生徒への個人面談等の指導を継続するとともに、進路講演会等を通して生徒の学習への意識の向上を図る</p>	B	<ul style="list-style-type: none"> ・1年は文理選択を兼ねた進路検討会、2年は科目選択を含めた進路検討会を8月下旬に行い、個人面談を複数回実施した。 ・7月模試偏差値54以上は1年54名、2年69名であった。 ・進路講演会を、1年は4・8月に実施した。2年は12月以降に実施予定である。 	進路指導部
	<p>各教科等における適切な目標設定や、指導の充実に向け、生徒の学力分析を進める。</p>	B	<ul style="list-style-type: none"> ・模試結果・宅習記録等から学力分析を行っている。教科会・学年会では、分析をもとに、課題のある生徒などに焦点を当てた教科担任面談を実施した。 ・スタディサポートの第2回目を導入し、半年毎に基礎学力や学習習慣の定着度を分析し、指導に活用する。 	進路指導部
<p>本校の教育活動を、中学生及び保護者等に対して、定期的・効果的に情報発信している。</p> <p>指標：オープンキャンパス参加者数(1,500人)、HPの更新回数(130回)</p>	<p>オープンキャンパスを年2回開催するとともに、昨年度改善を図った体験授業や生徒による進行・説明などの更なる充実を図る。また、中学校訪問を充実させ、本校の教育方針や特色について積極的にPR活動を行う。</p>	A	<ul style="list-style-type: none"> ・第1回目は1,086名の生徒・保護者が参加した。全てのプログラムで95%以上の肯定的評価を得た。 	総務部
	<p>最新の教育活動を発信するため、分掌間の連携を深め、できる限りリアルタイムでのHPの更新に努める。</p>	C	<ul style="list-style-type: none"> ・中学生や地域・保護者への案内をトップページで行った。学校行事についても更新を行ったが、さらにタイムリーに更新する必要がある。学年や部活動の更新回数は少なかった。更新回数は70回であった。 	総務部
	<p>理数コースの活動内容を紹介するパンフレットを作成し、中学生に配付するなど、理数コースの認知度アップに向けた取組を行う。</p>	B	<ul style="list-style-type: none"> ・教育活動内容を紹介するパンフレットの内容を精選し、掲載する写真にも工夫を凝らした。 	総務部 理数コース
<p>探究コースとして、理数コースの授業が展開され、生徒が理数コンピテンシーを発揮している。</p> <p>指標：評価規準の作成と活用レベル(4段階尺度)</p>	<p>探究に係るコンピテンシーの定義とそれを育成するためのカリキュラム開発を行うとともに、コンピテンシー・ルーブリックのプロトタイプを作成し、使用しながら修正・改善を図る。</p> <p>「中高生の科学研究実践活動推進プログラム」を活動フィールドの柱に位置づける。</p>	B	<ul style="list-style-type: none"> ・「中高生の科学研究活動推進プログラム」が年度途中からではあるがスタートした。 	理数コース

【評価結果の分析】

- ・7月模試における英数国総合の偏差値54以上が1年54名、2年69名であった。1年については8月末に高い進路目標の設定及び文理選択と模試結果をベースに検討会議を行った。それをもとに三者懇談と個人面談を行い、文理選択や学力向上に向けた指導の改善を図っている。2年については、3教科のバランスの良くない生徒などに焦点を当てた教科担任面談を行うなど進路希望に向けた組織的な指導を展開している。各学年ともに、資料を充実させ、毎回焦点を絞った検討となるよう改善を図っている。
 - ・3年については、6月マーク模試の偏差値50以上5-8文系59名(昨年29名)、5-7理系29名(昨年18名)、8月全統マーク模試は、5-8文系22名(昨年22名)、5-7理系23名(昨年15名)であった。9月マーク模試は、5-8文系31名(昨年20名)、5-7理系21名(昨年13名)であった。センター試験等の入試に向けて、担任は面談指導を重ね、教科担任は補習等において弱点を克服する講座や個別に面談を行うなど焦点を当てた組織的な指導を展開している。(進路指導部)
 - ・昨年度同様、第1回オープンキャンパスでは、歓迎パフォーマンスや学校紹介ビデオを開会行事に組み入れ、生徒が主体となって進化した。より明るく鮮明な画像のプロジェクターを利用し、参加者にわかり易い工夫をした。また、体験授業も2教科から5教科に増やし、希望者が582名と昨年度に比べ大幅に増加し、好評であった。保護者対象の学校説明・入学者選抜説明も2会場を用意し、好評であった。
- しかし、7月開催による熱中症等の懸念や、体育館の収容人数の限界、体験授業の希望者増加による運営の困難さといった課題が残った。本校HPの更新は、地域や保護者、生徒への案内と学校行事の内容報告について頻繁に行ったが、分掌・学年・部活動のページの更新が滞り気味である。(総務部)
- ・「中高生の科学研究活動推進プログラム」の連携校の決定が遅れ、実質9月からのスタートとなった。まだ、初期の段階であるため実験の準備や仮説の設定を行っている状況である。年末に向け、探究活動を充実させていきたい。(理数コース)

【今後の改善方策】

- ・模試結果等を分析し、目標達成に向けて生徒一人一人についての分析会議を継続し、成績中間層や進路志望が不明確な生徒、教科バランスに課題を抱える生徒に対する面談（教科担当者面談）や進路志望別指導など、教科・学年を超えて組織的に進めていく。3年については、入試本番に近づくと、より一層生徒個々の情報を共有するとともに、大学入試センター試験や二次対策指導、小論文指導など、生徒の進路実現に向けて組織的・計画的な指導を継続していく。（進路指導部）
- ・第2回オープンキャンパスも、受験体験談を組み込むなど本校生徒が中心となって進める予定である。次年度のオープンキャンパスの開催に向けて、業務用扇風機の利用や模擬授業実施会場の確保について今年度中に検討する。
本校HPの分掌・学年・部活動の更新回数を増加させるため、HPに掲載するフォーマットを定め、各部署との連携を密にし、更新依頼をタイムリーに行う。（総務部）
- ・「中高生の科学研究活動推進プログラム」は、これから後半に向けて研究活動を効率よく行い、遅れを取り戻したい。実験等は、放課後にも活用していく必要がある。また、時間割等を工夫して2時間連続で実験が可能となるようなやり方も検討していく。（理数コース）

3 北高生としての自覚とグローバル社会で逞しく生き抜く力の育成、個に応じた指導や支援の充実 ②④				
家庭学習を習慣化させる取組がなされている。 指標：宅習時間調査の目標達成率 (1年130分/日) 55% (2年130分/日) 60% (3年260分/日) 40%	学級担任による生徒への個人面談による指導を強化するとともに、進路講演会等を通して生徒の進路・学習への意識の向上を図る。	C	・宅習時間調査では、4月(1年46%, 2年46%, 3年4%), 6月(34%, 36%, 17%), 9月(35%, 38%, 42%)であった。	進路指導部
規範意識の高い生徒を育成する指導がなされている。 指標：1日平均遅刻者数	校門指導の継続や遅刻回数に応じた段階的指導を徹底する。また、担任や学年主任との連携を深め、生徒の情報を共有して効果的な指導を行う。	B	・一日の平均遅刻者数は4.36で昨年同時期と変わらない。警報発令時の遅刻者も数えているので実質は昨年を下回っている。	生徒指導部
生徒の自己存在感を高める取組がなされている。 指標：主体的に行事や委員会、部活動、ボランティア活動に参加したと考える生徒の割合	掲示板等を活用し、部活動の活動内容や試合結果を披露する。また、ルワンダへの体育館シューズの寄贈などのボランティア活動を継続・充実させる。地元の小学校・中学校・大学と連携し、取組の充実を図る。部活動顧問会議を定期的に開催し、文武両道に向けた指導の充実を図る。	B	・ルワンダへのシューズ寄贈は生徒会を中心として年々充実してきている。今年は「ひろしま県民テレビ」でも取り上げられた。 ・今後、あしなが募金活動参加などを呼びかけ、年度末にアンケート調査を実施する。	生徒指導部
文武両道を目指す生徒を育成する取組がなされている。 指標：部活加入率(90%)	新入生に対する生徒指導講話等を充実させるとともに、文武両道を目指す指導をきめ細かく行う。生徒一人一人に目標をもって生活し、行動するよう生徒指導部が顧問や担任と連携して指導を行う。	B	・部活動加入率は5月1日現在で84%、目標をやや下回った。現在まで、中国大会以上出場の部活は、運動部3、文化部1である。	生徒指導部
特別支援教育活動が組織的に行われている。 指標：生徒・保護者アンケートの肯定的回答率	学年会・教科会等で教職員間の連携を図り、生徒の実態把握に努める。生徒に対する対応を早期に行うために、教育相談、サポート委員会を有効に活用し、支援を必要とする生徒の支援方針と方法を検討・決定し、全教職員で組織的な支援を進める。	B	・定例会議で生徒の状況を共有し、具体的な支援方法について検討している。月1回の教育相談は十分に活用され、サポート委員会で早期に連携・協議することが生徒支援につながっている。	保健部
校内美化活動が組織的に行われている。 指標：生徒・保護者アンケートの肯定的回答率	美化委員会や日々の清掃活動、地域連携による小中高合同美化活動を通して、生徒の環境美化に対する自主的な活動を促し、校内全体の取組につなげる。	B	・美化強化月間や大掃除を通して、美化委員会を中心に積極的に清掃活動に取り組む意識が高まっている。	保健部

【評価結果の分析】

- ・年5回(4・6・9・11・1月)の宅習時間調査を行い、その結果から家庭学習習慣の定着をより図るために個人面談の機会を利用し、指導に活用している。（進路指導部）
- ・一日平均遅刻者数は、昨年同時期と変わらない。警報発令時の遅刻者も数えているため、実質は昨年を下回っている。登下校時の交通マナー指導については、現在放送部による交通安全ビデオの制作が進んでいる。
全体に対する生徒指導講話や日常の説諭の中で自己指導能力を意識させるよう努めている。部活動加入率は84%に留まり、目標をやや下回っている。これまで、中国大会以上に進出した部活動は運動部が3、文化部が1であった。（生徒指導部）
- ・生徒を対象に7月に実施した第1回オープンキャンパスに係るアンケート結果では、本校は「教育相談体制が整っており、心配事や悩み事を相談しやすい環境である」という回答が大半を占めた。定例会議では週単位で生徒の状況について情報共有を行っており、気になる生徒に対し、早期にきめ細かな支援ができていく。（保健部）
- ・校内美化活動については、美化委員会を中心にゴミの分別と掃除の徹底に取り組んでいる。アンケート結果から、ゴミの分別について

は日々の指導により成果が上がっている。美化強化月間及び大掃除後の点検では、全区域の掃除状況を複数人で点検しており、生徒の取組状況は概ね良好である。しかし、校内のゴミを自主的に拾うと回答した生徒はわずか 18.1%であり、自主的に校内美化を進めることができる生徒の割合を増加させる必要がある。(保健部)

【今後の改善方策】

- ・進路指導部と教務部が主となり、学力向上に向けて、とりわけ活用コアスクールの事業と絡めた授業づくりのための環境整備と取組の強化を進め、各教科が教科会議で内容を検討し、実践していく。
年5回の宅習時間調査の中で、週10時間未満の生徒に対して進路目標や学習方法を含めた具体的な面談指導(正副担任・教科担任・学年主任)を行い、学習習慣や生活習慣の改善を図っていく。(進路指導部)
- ・遅刻者に対する個別指導をきめ細かく行うとともに、これから健康管理の重要性を生徒に訴え、受験を控えた3年生に対する指導も強化していく。交通マナー指導については、委員会を活用した生徒が主体となるマナーアップの取組を実施する。(生徒指導部)
- ・保護者対象のアンケート結果では、教育相談体制の整備状況について「よくわからない」という回答が10%であった。(昨年度よりも減少)保護者に対する周知の機会を増やすとともに、他校の実践例を参考にするとともに、周知方法を工夫する。
校内美化活動については、「掃除は休まない」という回答が74.9%に対し、「掃除に積極的に取り組んでいる」という回答は60.4%であり、肯定的回答が減少している。校内の環境美化を積極的に進めていこうという意識を今以上に高めるため、「校内美化と学習効果」、「校内美化とクラスづくり」、「校内美化と部活動」等について、日々の学校生活の中で意識させ、行動につなげていく場を組織的に設定する。校舎外にもゴミ箱を設置し、生徒の自主的な行動を促す。(保健部)